剣は知つていた

剣は知っていた 下

柴田錬三郎

新潮社版

剣は知っていた（下）

昭和三十二年九月二十一日 印刷
昭和三十二年九月二十五日 発行

定価 弐百拾円
地方売価 弐百弐拾円

著者 柴田錬三郎

発行者 佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表 七一一一(九)・六一〇一(五)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷・扶桑印刷株式会社 製本・新宿 加藤製本所
© by R. Shibata Printed in Japan

目　次

柳生父子……七
比翼の鳥……一九
時雨峠……四四
決闘……七一
武蔵野……九九

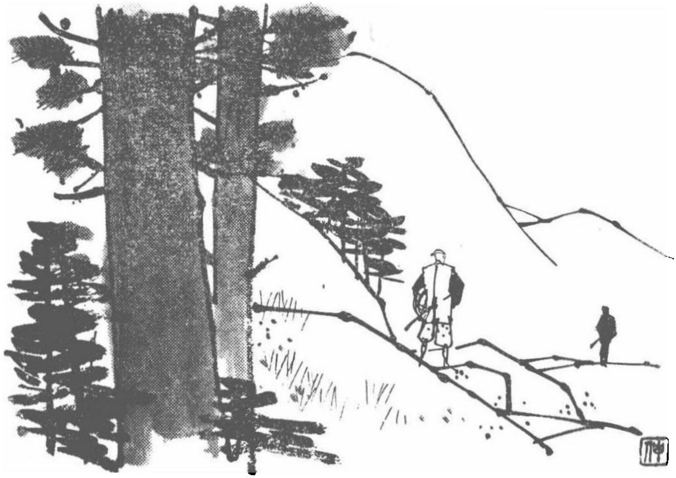
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はだか修羅……一三一
笛ふたたび……一四一
万里一刀……一五八
孤城清風……一八三

装幀・挿絵　御正伸

剣は知っていた

下巻



柳生父子

手をのばせば、すぐにとどきそうな峰から、音もなく濃霧が生れ、麗らかな春光をつつみながら、みるみる山肌をはい下って行く——

とみるまに、はるか高い山嶺は、薄絹を脱ぎすてるように、鮮かに、蒼空に映えるのであった。

どこへ消えるのか、動いてやまぬその霧が、どうどうと、躁がしく岩を噛んで流れ落ちて行く渓谷の底へ吸い込まれて行った時、ゆるやかな傾斜の尾根径に、ふたつの人影が、浮きあがった。

ひとりは、もう六十歳を越えているであろう、見事な白髯の古武士。

そのつれは、これはまだ二十代の半ばにも達していない、眉目秀れた若ざむらいであった。

父子であることは、その特長のある広い額と高い鼻梁で、瞭然とする。
「宗矩、途に迷うたのではないかな?」
老人の方が、そう言って、左方の山稜をふり仰いだ。
「あれは、明星嶽とおぼえる」
「すると、父上、われわれは、鷹ノ巣を通り過ぎて、宮城野をまわったことになります」
「そうらしい。……が、まあよい。落ち水に沿うて行けば、自ずと相模の野に降り立つことになろう」
それから、さらに、二町あまり、尾根径を辿って行った時、急に、眼下に、霧の幕が払われて、うすずみを刷いたように、朝焼けの平野が、白い湾弧を抱いている展望がひらけた。
小田原である。
老人は、足をとどめて、目を細めた。
「栄位勢利、譬えば寄客の如し、というが、この国もまた破れて、山河だけが残ったのう——」
しみじみとした声音であった。

栄枯常なき戦国の辛酸を、この古武士もまた、つぶさにあじわい、今日、浪々の身をかこっている境遇にあったのである。
大和の国柳生ノ庄、柳生城の元領主柳生石舟斎宗厳——それが、この人であった。つきしたがう若者は、その五男又右衛門宗矩であった。
柳生一族の運命は、とりもなおさず興亡めまぐるしい戦乱の歴史を象徴していた。
宗厳の父美作守家厳は、三好長慶に従って武功があったが、天文十三年、多年の宿敵筒井順昭に柳生城を包囲され、新介といった十五歳の宗厳を質子としてさし出さなければならなかった。
新介は、筒井城において、質子としてのあらゆる屈辱に堪えた。順昭の子藤勝(のちの順慶)の虐待は、目にあまるものがあったのである。
新介が、柳生城へ戻ることがゆるされたのは、二十五歳の時であった。
永禄二年に、信貴山城の松永久秀が、柳生城と盟をむ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すびたいと書を送って来てより、柳生一族は、ようやく筒井城の隷属からはなれることができたのであった。

しかし、松永久秀が、六年後に、二条御所を火焰につつんで、将軍足利義輝を弑逆するにおよんで、宗厳は、翻然として、兵馬を動かすことよりも、剣一途に生きる決意をしたのであった。

将軍を喪った京洛に、騒然たる野望が渦まいていたが、その形勢をよそに、柳生の孤城で、ひたすらに、剣をみがいた宗厳は、やがて、千載一遇の機会を迎えたのであった。

すなわち、奈良の宝蔵院の院主胤栄から、

「上州箕輪の城主上泉伊勢守殿が目下御逗留中であるが、後学のために、試合を望まれては如何であろう」

と、一書を送って来たのである。

宗厳は欣喜して、宝蔵院へおもむいた。

その結果は、宗厳の惨たる敗北におわった。

その時、上泉伊勢守秀綱は、すでに六十に手がとどこうとしていた。宗厳は、まだ四十を越えたばかりであった。

にもかかわらず、木剣と木剣の対峙が一刻（二時間）を過ぎたとき、顔面蒼白と化し、冷汗をりんりと流して、肩で喘ぎ、目晦んだのは、宗厳の方であった。伊勢守の方は、水のごとく、みじんもかわらぬ静止をたもって、宗厳の変りゆく相を、見まもっていたのである。

「参った！」

木剣は一合も交らず、宗厳のからだは、道場の板敷へ崩れたのであった。

伊勢守は、席をあらためると、しずかに、

「お手前が敗れたのは、勝とうという一念にこりかたまった故でござる」

と、言った。

また、

「剣は、打ち合って勝つ、と心得るのが、そもそもあやまりではあるまいか。剣の極意は、無手にある、とそれがしは思う。兵馬をきたえるのは、兵馬を必要とせぬ治

国をつくるためであるのと同じことわりと存ずる。そこを、とくと考えられて、剣の技を工夫されては如何であろう」

とも、言った。

この言葉は、ふかく、宗厳の胸に刻まれた。

柳生城に帰って、その日から——宗厳は、昼夜わかたぬ刻苦をつづけ、家臣たちから、狂気に陥入ったのではあるまいか、と屢々いぶかられた。

伊勢守が、ふらりと訪れたのは、三年後であった。

ふたたび、両者は、木剣を把って、対峙した。

しかし、こんどは、ほんの数秒をもって、伊勢守の方が、木剣を引いた。

「無刀の極意、たしかに見とどけ申した。今日、お手前とたたかって、勝ちを得る者は、それがしの脳中に浮ばぬ。……こん後は、柳生新陰流と称されるがよかろう」

と、ほめたたえて、新陰流の印可とともに、極意書を与えて、何処へともなく去ったのであった。

爾来——。

宗厳は、柳生新陰流を、さらに大成すべくその他のことは、ことごとく忘れすてたのであった。

そして、手字、手裏剣、水月神妙剣の極意をあみ出し、さらにその上に、西江水という不思議の秘剣を生んだのであった。

兵法は懸得表裏みつなれど、つづめてみればただひとつなり

この歌は、西江水に至って詠んだものである。

だが、その間に、天下は、大きく変転していた。

松永久秀は亡び、足利義昭もまた滅び、さらに、旭日の勢いにあった織田信長もまた、本能寺に仆れ、かわって、天下は豊臣秀吉のものとなっていた。

宗厳が、柳生の所領を没収されたのは、羽柴秀長が、あらたに、筒井順慶に代って大和の支配者になってからであった。

かねて、宗厳の剣をねたんでいた戒重肥後守の家臣松田織部之助が、柳生の庄に、隠し田がある、と秀長に密

告したのである。豊臣秀吉は、天下統一のために、各所領の土地の段別、石高の調査については、非常にきびしく、その正確さを、諸侯に要求していた。もし隠し田を持っていることがわかれば、領地没収の厳罰をもってのぞんだのである。

かくて——。

柳生一族は、一片の領土ももたぬ一郷士になりさがったのである。

この時、宗厳には、十一人の子女があった。うち五人が男で、長男が新次郎厳勝といい、はじめ筒井順慶のもとにあったが、のちに肥後の加藤家へ寄食した。

次男、三男は、出家した。

四男の五郎右衛門は、伯耆の守護中村家の老臣横田内膳へ身を寄せた。

宗厳の手もとに残されたのは、五男の又右衛門宗矩だけであった。

山中の猫額大の畠をたがやしてほそぼそと生きてゆくためには、一家離散せざるを得なかったのである。

宗厳は、名を石舟斎とかえた。

兵法の舵をとりても世の海を渡りかねたる
石の舟かな

この心懐によってつけた号であった。

晴耕雨読のままに、朽てはてゆくことを覚悟していた宗厳は、しかし、今年に入って、江戸の新城主徳川家康から、

「一度会いたい」

と丁寧な書状をもらったのである。

宗厳は、剣の心法修養にうちこんだあまり、ついに祖廟の地を喪ったが、しかし、剣禅一如の境地に達し、すでに、高禄ののぞみなどすてさっていた。

ただ、家康から江戸へ来て欲しいと懇望されるや、又右衛門宗矩にさずけた柳生新陰流の真価を見てもらうには、家康こそ最もふさわしい人物であると考えたのであった。

家康が、海道一の弓取の名を負い、騎馬に長じていることは、あまりにも有名であった。剣法において、免許

皆伝を得ているのも、ただの殿様芸ではないと、家康と手合せした伊勢守の高弟疋田文五郎から宗厳はきいていた。

――よし！　宗矩の剣を、家康殿に見ていただこう。

柳生谷の老竜は、決意して、山砦を出ると、はるばる江戸へむかって来たのである。

「宗矩――」

「はい」

「言はでものことじゃが、そちは家康殿麾下の剣客に、もし敗れたら、二度と、この箱根を越えて柳生の庄へはもどれぬぞ」

その口調は、淡々としていた。

「覚悟いたして居ります」

宗矩も、しずかな声音をかえした。

「明日は、江戸に入れるの」

ゆっくりと山坂をくだりかけて、ふと、石舟斎宗厳は、神経にびりりとつたわる鋭い気合が、何処か遠い距離の場所に発しているのをさとった。

「わかるか、宗矩？」

父に、そう言われて、

「は？」

と、いぶかしげに見かえした宗矩は、その眼光が、見えないものを見、その耳が、きこえないものをきいていることだけをみとめて、はっとした。

宗矩には、父がさとったものを、五官に感じ得なかった。

石舟斎の、ずうっと見わたした視線は、渓流のむこうの、鬱蒼（うっそう）たる老杉の密林の一点にぴたりと据えつけられた。

「あそこじゃな――」

その呟きに、宗矩は、全神経を磨ぎすませた。

しかし、老杉の奥からきこえるのは、かすかな滝の瀬の音だけであった。

石舟斎は、そこへむかって、足をはこび出した。

うしろにしたがった宗矩が、父のさとったものを、き

きとったのは、急勾配の斜面をうねる細道を降りて、樹間に、小さな七色の虹を描く白い瀑布を見出す地点に立った時であった。

とうとうと地軸をゆさぶっている滝の音を截って、一種異様な音響が、老杉の奥で山気をふるわせていたのである。

それは、幽邃の原始の世界が、徐々に変化してゆくための神秘ないとなみをおこなっているのではあるまいか——と思わせるばかり、森厳なひびきを冴えさせていた。

——なんだろう？

宗矩は、遽に、心身のひきしまるのをおぼえた。

石舟斎は、すでに、その音がなにものか、さとっているらしい足どりで、ゆっくりと、滝つぼを眼下にする断崖のふちを辿って行く。

やがて——。

石舟斎の足がとめられるや、背後からのびあがった宗矩は、老杉の奥に起っている光景を見て、思わず、息をのんだ。

一人の若者が、木剣を大上段にとって、おのれの背丈ほどの巨石に、正対していた。

その構えは、清澄の山気につつまれて、ふしぎな美しい静けさをたたえていた。

石舟斎父子の眼眸が、鋭く見まもるうちに、若者の木剣は、巨石へ、ふりおろされた。それは、きわめてかるやかな、羽毛がふわり舞い落ちるに似た一撃であった。しかも巨石の面へ、ふれるかふれないかの間髪で、ぴたっと止められたのである。

おどろくべし——。

巨石は生きもののように、ぽかっと口をあけて、左右へ傾いた。

木剣が打った音は鳴らず、巨石が裂ける悲鳴がつらぬいた——そんなひびきであった。

割れた断面は、けずったように平らであった。

気がついてみると、すでに、そうして割れた巨石が、幾個か、若者の周囲にあったのである。

「うむ！」

石舟斎が、ひくく、唸った。
若者は、やおら、こちらを見た。その顔は、眉殿喬之介のものにまぎれもなかった。
喬之介は、見知らぬ痩軀の老人と目が合った瞬間、微妙な、ふしぎな爽やかなものが五体につたわるのを感じた。
——何者であろう？
曾て、喬之介は、老師以外に、このような高風をそなえた人物に出会ったおぼえがなかった。
石舟斎は、ゆっくりと近づくと、温容に微笑をたたえて、
「おことは、その技を、一人で会得されたか？」
「べつに、会得というほどの技でもありません」
「だが、万人に一人も、そのような大きな石を、ひと打ちで割る技をもつまい」
「そうお見えになるだけです。石を割ることは、きわめてかんたんです。いずこの石工でも、みな、この程度の石を、ひと打ちで割りましょう」
「ほう、その理は？」
「石には目があります。そこを打てば割れます。割れた石にも目があり、そこを打つ。そうしていけば、石は、ついに、微塵となる道理ではありますまいか」
「おことは、それを、一人で発見されたか？」
「いや、師の教えを応用してみたにすぎません」
「師とは？」
「わたしも、その姓名を知りません」
「わしは、大和柳生谷に住む柳生石舟斎宗厳、これはせがれ又右衛門宗矩と申す者じゃが、おことの御尊名は？」
「眉殿喬之介と申します」
「ねがわくば、せがれと、一手、立会うて頂けまいか？」
喬之介は、宗矩を見た。
宗矩は、微笑して、会釈した。
喬之介は、ちょっと考えていたが、
「せっかくのお申出ながら、おことわりします」
と、言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com